

主要産地における平成26年産水稻の収穫量及び作柄概況等について 第2報 (9月29日現在)

作成：公益社団法人米穀安定供給確保支援機構情報部(平成26年9月29日)

全 国 道 府 県	収穫量				作 況			品質概況等		参 考		
	予想収穫量 (主食用)	前年産主食用 収穫量	前年産収穫量 (確定値)との比較		作況指数 26年産	作況指数 25年産	前年産 との比較 対 差	26年産水稻う るち玄米1等米 比率 (26年8月末)	25年産水稻う るち玄米1等米 比率 (25年8月末)	生産数量目標		
			対 差	対 比						平成26年産	前年産との比較	増減率
	t	t	t	%				%	%	t	t	%
全 国	7,899,000	8,182,000	▲ 283,000	96.5	101	102	▲ 1	76.6	74.0	7,650,000	▲ 260,000	▲ 3.3
北 海 道	598,200	601,300	▲ 3,100	99.5	108	105	3		100.0	554,140	▲ 18,800	▲ 3.3
青 森	256,600	272,100	▲ 15,500	94.3	104	104	0			247,000	▲ 12,220	▲ 4.7
岩 手	286,200	287,800	▲ 1,600	99.4	105	102	3			275,540	▲ 10,810	▲ 3.8
宮 城	374,800	388,600	▲ 13,800	96.4	104	104	0	56.7	100.0	362,630	▲ 18,140	▲ 4.8
秋 田	453,000	450,200	2,800	100.6	104	100	4			433,040	▲ 13,390	▲ 3.0
山 形	378,800	386,100	▲ 7,300	98.1	104	102	2			358,570	▲ 15,630	▲ 4.2
福 島	351,200	368,600	▲ 17,400	95.3	104	104	0	90.9	67.3	348,420	▲ 7,440	▲ 2.1
茨 城	397,700	398,900	▲ 1,200	99.7	105	104	1	93.5	95.4	341,550	▲ 7,340	▲ 2.1
栃 木	314,800	334,900	▲ 20,100	94.0	100	102	▲ 2		100.0	309,330	▲ 12,220	▲ 3.8
埼 玉	169,200	165,900	3,300	102.0	102	98	4	72.0	85.4	152,680	▲ 3,920	▲ 2.5
千 葉	325,300	329,100	▲ 3,800	98.8	104	104	0	95.5	95.0	249,280	▲ 6,420	▲ 2.5
新 潟	578,100	594,400	▲ 16,300	97.3	102	103	▲ 1	91.8	95.6	535,640	▲ 10,030	▲ 1.8
富 山	193,900	198,200	▲ 4,300	97.8	101	102	▲ 1	96.9	86.1	192,340	▲ 3,920	▲ 2.0
石 川	123,400	130,500	▲ 7,100	94.6	98	101	▲ 3	89.6	92.7	126,400	▲ 3,000	▲ 2.3
福 井	126,000	134,700	▲ 8,700	93.5	98	102	▲ 4	92.5	89.9	128,130	▲ 5,230	▲ 3.9
長 野	202,400	213,000	▲ 10,600	95.0	99	101	▲ 2		100.0	196,640	▲ 7,760	▲ 3.8
滋 賀	157,400	169,300	▲ 11,900	93.0	97	102	▲ 5	77.0	81.6	163,380	▲ 7,000	▲ 4.1
兵 庫	177,400	189,800	▲ 12,400	93.5	96	100	▲ 4	50.3	73.0	181,930	▲ 6,010	▲ 3.2
岡 山	156,700	163,800	▲ 7,100	95.7	96	97	▲ 1		61.0	160,190	▲ 5,850	▲ 3.5
広 島	123,300	132,600	▲ 9,300	93.0	95	99	▲ 4	30.1	65.8	130,130	▲ 4,270	▲ 3.2
山 口	103,000	111,000	▲ 8,000	92.8	95	97	▲ 2	88.0	69.2	110,820	▲ 5,530	▲ 4.8
愛 媛	72,600	74,900	▲ 2,300	96.9	98	99	▲ 1	46.6	21.1	74,490	▲ 1,690	▲ 2.2
高 知	56,400	57,900	▲ 1,500	97.4	97	98	▲ 1	<u>22.2</u>	<u>19.1</u>	50,050	▲ 1,700	▲ 3.3
福 岡	176,800	182,500	▲ 5,700	96.9	96	96	0	34.8	12.2	184,380	▲ 6,860	▲ 3.6
熊 本	181,200	188,300	▲ 7,100	96.2	97	97	0	<u>46.3</u>	<u>30.1</u>	189,920	▲ 7,790	▲ 3.9
宮 崎	85,800	92,600	▲ 6,800	92.7	99	100	▲ 1	<u>70.3</u>	<u>66.2</u>	94,470	▲ 4,660	▲ 4.7
鹿 児 島	103,700	112,500	▲ 8,800	92.2	97	101	▲ 4	<u>38.0</u>	<u>52.5</u>	111,540	▲ 3,980	▲ 3.4

注：更新箇所について、前回より増加した箇所は二重下線で、減少した箇所は下線で表した。

道府県	品質概況等 自治体等公表資料（公表資料の抜粋）	備考
北海道	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在の作柄は、6月全般の好天による旺盛な分けつにより穂数が「多い」、もみ数が「やや多い」となったこと、登熟は、出穂・開花期以降の気象経過により「平年並み」が見込まれることから、10a当たり予想収量570kg（作況指数108）が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>精白化率は93%で、生育はやや早く収穫作業は平年並。（9月19日付）</li> <li>8月の紋枯病の発生は、岩見沢市、北斗市ともに平年より多かった。（9月18日付）</li> <li>9月はアカヒゲホソミドリシの発生量が「多」と予報。（8月29日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「北海道水田農業ビジョン」に基づき水張面積の拡大に取り組むとともに、稲作所得の向上や北海道米の安定的な需要確保に向けた施策を推進する。</li> <li>共販体制の強化や実需者との契約取引の拡充を図るとともに、消費者ニーズに対応した商品開発・販促企画により道産農畜産物のブランド力を高め、有利販売に努める。</li> </ul>
青森	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在の作柄は、出穂期以降、日照時間が平年を下回って経過し、登熟が「やや不良」と見込まれるものの、全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が「多い」となったことから、10a当たり予想収量は608kg（作況指数104）が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>9月10日現在の登熟歩合は、黒石「つがるロマン」が64.9%と平年を19.0%下回り、十和田「まっしぐら」は67.4%と平年を8.6%下回ったが、穂数が多いことから、気温が概ね平年並みに経過していることから、登熟は順調に進んでいるものと考えられる。（9月12日付）</li> <li>9月上中旬の穂もちとウンカ類の発生量は、津軽地域、県南地域ともに多かった。（9月19日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米穀の収穫前契約による安定的取引の拡大（44,820%、前年比108%）</li> </ul>
岩手	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在の作柄は、出穂期以降、日照時間が平年を下回って経過し、登熟が「やや不良」と見込まれるものの、全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が「多い」となったことから、10a当たり予想収量は559kg（作況指数105）が見込まれる。（9月26日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実需者の早期見える化に向けた、播種前契約の拡大（25年産主食うるち米82,262%、前年比105%）</li> </ul>
宮城	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在の作柄は、出穂期以降、日照時間が平年を下回って経過し、登熟が「やや不良」と見込まれるものの、全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が「多い」となったことから、10a当たり予想収量は552kg（作況指数104）が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>9月16日現在の刈取の進行率は、県全体で2.3%、作業が進んでいる大河原地区で6.5%となっている。（9月17日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>水田フル活用に向けた、25年産米の集荷率向上と契約栽培の取組強化（複数年・播種前・収穫前契約数量142千%、前年比134%）</li> </ul>
秋田	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在の作柄は、出穂期以降、日照時間が平年を下回って経過し、登熟が「やや不良」と見込まれるものの、全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が「やや多い」となったことから、10a当たり予想収量は596kg（作況指数104）が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>（平鹿）一部の圃場では稲刈りが始まった。（9月19日付）</li> <li>（由利）稈長は83.0cmで平年比101%、穂長は18.6cmで平年比102%、穂数は456本と平年比94%。登熟が早いほ場では刈り取り作業が始まっている。（9月19日付）</li> <li>（鹿角）9月16日時点では、稈長が85.6cm（平年比105%）、穂長は17.5cm（平年比101%）、穂数は458本/m<sup>2</sup>（平年比98%）。（9月19日付）</li> <li>（秋田）9月16日調査では「あきたこまち」の生育は、稈長が98.8cm（平年比105%）、穂長が17.8cm（同99%）、穂数が497本/m<sup>2</sup>（同115%）。9月15日現在の刈り取り作業の進捗は0.5%（平年0.7%）。（9月19日付）</li> <li>（雄勝）9月15日現在の収穫作業の進捗状況は、0.7%となっている。（9月19日付）</li> <li>（仙北）「あきたこまち」の刈り取りが本格的に始まる見込み。（9月19日付）</li> <li>9月は斑点米カメムシ類の発生量が全県で「多い」と予報。アワヨトウは局地的に多発しており、全県で発生量が「多い」と予報。（8月28日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米穀の播種前・収穫前契約における3者契約・複数年契約の数量拡大（29,244%、前年比101%）</li> </ul>
山形	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在の作柄は、出穂期以降、日照時間が平年を下回って経過し、登熟が「やや不良」と見込まれるものの、全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が「多い」となったことから、10a当たり予想収量は620kg（作況指数104）が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>刈取り適期を迎えている。8月中旬以降の気温がやや低かったこと等から、青未熟粒がやや多く、水分むらが大い傾向。品質・食味を重視した乾燥調整等を指導。（東南村山）（9月22日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「つや姫」の安定した高品質・良食味生産体制の確立とブランド化推進（26年産6,692ha、前年比103%）</li> </ul>
福島	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在の作柄は、出穂期以降、日照時間が平年を下回って経過し、登熟が「やや不良」と見込まれるものの、全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が「多い」となったことから、10a当たり予想収量は561kg（作況指数104）が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>9月11日現在の県内各地の出穂期は各品種とも平年並から早くなった。成熟期予想は、平年に比べ郡山が2日から3日遅れ、相馬と会津坂下が1日から2日早まる見込み。</li> <li>穂もちの発生は平年並。（9月11日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生産者にとって作りやすい品種特性（耐倒伏性、品種収量安定性）の啓蒙を通じた米の県オリジナル品種「天のつぶ」の作付拡大（約2,000ha、前年比252%）</li> </ul>
茨城	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在の作柄は、北部・鹿行及び南部では田植期以降の天候に恵まれ穂数及び1穂当たりもみ数がやや多くなったことから、全もみ数が多くなり10a当たり予想収量は北部が549kg（作況指数106）、鹿行が551kg（同106）、南部が556kg（同106）が見込まれる。西部では、穂数は平年並みであったものの、1穂当たりもみ数がやや多くなったことから、全もみ数がやや多くなり、10a当たり予想収量は543kg（同103）が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>「あきたこまち」の玄米の外観は、光沢は平年並み程度であるが、充実度・粒ぞろいは平年よりやや劣る。白未熟粒の混入は、平年はほとんど見られないが、本年産はやや見られる。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は平年並みか平年より僅かに多くみられる。胴割粒の混入は、軽妙なものが僅かに見られる程度。被害粒の混入は比較的少ないが、地域により差がある。着色粒は全体的に散見される程度である。（9月25日付 精米工）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ふくまる」（県オリジナル品種）の作付推進（354ha、前年比3,078%）、および「はるみ」（全農オリジナル品種）の作付推進（106ha、前年比183%）</li> </ul>
栃木	<ul style="list-style-type: none"> <li>県平均の出穂期は、平年に比べ3日早い8月1日となった。穂数は平年並み、1穂当たりもみ数は、おおむね天候に恵まれたことから、平年並みとなった。全もみ数は、穂数及び1穂当たりもみ数ともに平年並みとなったことから、平年並みとなった。登熟は、8月中旬以降気温及び日照時間が平年を下回って経過したものの、全もみ数が平年並みとなったことや倒伏面積が平年に比べ少ないことから、平年並みが見込まれる。（9月26日付）</li> <li>8月下旬～9月上旬の発生程度は、穂もちはやや少なく、縞葉枯病はやや多かった。（9月19日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>品質管理にこだわり、新鮮なお米、安全なお米、おいしいお米をお届けします。</li> </ul>

	品質概況等	備考
埼玉	<ul style="list-style-type: none"> <li>田植期の早い東部及び田植期の遅い西部ともに、6月中旬以降の高湿・多照の影響により分けつが旺盛となり差数が確保できたこと等により穂数はやや多くなり、1穂当たりもみ数は平年並みとなったことから、全もみ数は「やや多い」となった。なお、登熟は、8月中旬下旬以降、気温及び日照時間が平年を下回っていることから「やや不良」が見込まれる。(9月26日付)</li> <li>早期栽培の収穫は「あきたこまち」等、極く早いもので、平年より3~5日程度早く始まったが、以降のものは、8月下旬の曇雨天により、平年並~やや遅れている。早稲栽培、普通栽培は差数は多く推移し、穂数は平年並からやや多い。出穂期は平年並。(9月4日付)</li> <li>9月は斑点米カメムシ類の発生量は「多」、いもち病(穂いもち)とすす病(ウンカ、ヨコバイ類)の発生量は「並」の予報。(8月28日付)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>J・A・T・A・Cとの連携による、大規模生産者対応を中心とした米の集荷拡大(206戸(前年比176%)、集荷数量5,655t(前年比183%))</li> </ul>
千葉	<ul style="list-style-type: none"> <li>出穂最盛期は、平年に比べて5日早くなった。穂数は、田植期以降、気温及び日照が平年を上回って推移したため「やや多い」となり、全もみ数は、穂数がやや多いことから「やや多い」となった。登熟は、出穂期以降、気温・日照とも平年を上回って推移していることから、「平年並み」が見込まれる。刈取最盛期は、降雨により刈取りが遅れ「平年並み」となった。以上のことから、10a当たり予想収量は558kg(作況指数104)が見込まれる。(9月26日付)</li> <li>7月下旬と収穫期におけるヒメトビウンカの発生量が多い傾向にあったことから、イネ縞葉枯病の防除対策を指導。(9月10日付)</li> <li>「コシヒカリ」は、胴割粒及び着色粒は地域により混入率に差がある。また、光沢も地域により差があるので注意が必要である。白未熟粒及び青未熟粒の混入は比較的少ない。</li> <li>「ふさおとめ」は、充実度、整粒歩合及び光沢は概ね良い。肌ずれは見られなかった。粒ざら及び粒形は良好である。白未熟粒の混入は全体的に少ない。青未熟粒は適度に混入している。胴割粒、被着粒の混入は比較的少ない。着色粒は全体的に散見される。(9月9日付 精米工)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>担い手への品目提案、技術指導、販売提案などによる生産振興対策の支援強化(実需者提携米53ha(前年比379%))</li> </ul>
新潟	<ul style="list-style-type: none"> <li>全もみ数(穂数×1穂当たりもみ数)は、地帯に差がみられるもの5月下旬以降出穂期までおおむね天候に恵まれたことから、「やや多い」となった。登熟は、全もみ数が「やや多い」となったこと、出穂期以降の8月が低温・少照で推移したことに加え、台風第11号のフェーン現象等の被害により「やや不良」が見込まれる。9月15日現在の作柄は、10a当たり予想収量549kg(作況指数102)が見込まれる。(9月26日付)</li> <li>コシヒカリの収穫適期は、県平均で9月17日から9月24日頃の見込み。9月17日現在のコシヒカリの収穫進捗は、県内全域の1割程度。中越地域では3割程度、その他の地域では1割以下となっている。倒伏は、前年及び近年に比べて少ない状況。(9月18日付)</li> <li>(新潟)日照不足により登熟の進みは緩慢。(9月10日付)</li> <li>早生品種で青未熟粒や死米の発生が多く、混入による格落ちが目立つ。コシヒカリにおいても未熟粒の混入が懸念されるため、丁寧な乾燥・調整作業を指導。(9月12日付)</li> <li>(巻)日照不足や低温傾向のため登熟が緩慢となっている。既に収穫している早生種では青米の混入が多い傾向。(9月10日付)</li> <li>(南魚沼)登熟期間は、気温が低め、日照が平年より少なく経過していることから、籾の黄化は緩やか。9月10日現在の収穫期予想は南魚沼市で9月15~24日、湯沢町で9月22~28日。(9月11日付)</li> <li>(十日町)平坦地のコシヒカリの収穫適期のめやすは、9月14日・18日・22日(出穂期8月1日・4日・7日)。山間地・台地のコシヒカリの収穫適期のめやすは、9月23日・30日・10月6日(出穂期8月6日・11日・15日)(9月18日付)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米の担い手との契約栽培による農家経営安定と集荷拡大(13,185t、前年比420%)および需要の契約確保に向けた大口需要者との複数年契約の実施(4,170t、新規)</li> </ul>
富山	<ul style="list-style-type: none"> <li>出穂最盛期は、8月2日で平年に比べ2日早く、前年に比べ2日遅い。穂数は、生育期間の好天により「やや多い」となり、1穂当たりもみ数は「平年並み」となった。全もみ数(穂数×1穂当たりもみ数)は、穂数が「やや多い」、1穂当たりもみ数が「平年並み」となったことから「やや多い」となった。登熟は、8月の日照不足等から「やや不良」が見込まれる。被害は、紋枯病やニカメイチュウ等の発生が散見される。これらのことから、9月15日現在の10a当たり予想収量は543kg(作況指数101)が見込まれる。(9月26日付)</li> <li>9月のツマグロヨコバイの発生量は「並(局部多い)」、いもち病(穂いもち)や斑点米カメムシ類等の発生量は「並」の予報。(9月1日付)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>富山米ブランドの確立に向けた、販売促進キャンペーンの実施による産地精米の拡大(10,634t、前年比109%)</li> </ul>
石川	<ul style="list-style-type: none"> <li>全もみ数(穂数×1穂当たりもみ数)は、田植期から出穂期まではおおむね天候に恵まれ、「平年並み」となった。登熟は、出穂期以降の8月が記録的な雨量となり日照不足で推移したことなどから、「やや不良」が見込まれる。この結果、9月15日現在の作柄は、10a当たり予想収量508kg(作況指数98)が見込まれ、地帯別には加賀は525kg(同97)、能登は484kg(同98)が見込まれる。また、主食用作付見込面積に10a当たり予想収量を乗じた予想収穫量(主食用)は、12万3,400tが見込まれる。(9月26日付)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>石川県産米の需要確保に向けた播種前・収穫前契約の実施(30,570t、前年比93%)および輸出用米(新規需要米)の販売拡大(91t、前年比456%)</li> </ul>
福井	<ul style="list-style-type: none"> <li>出穂最盛期は8月1日で、平年に比べ2日、前年に比べ1日早くなった。穂数は、5月第5半旬以降、高温多照で経過したことから差数が増加し、「やや多い」となった。穂当たりもみ数は、幼穂形成期の7月が高温多照で経過したことから「平年並み」となった。全もみ数(穂数×1穂当たりもみ数)は、穂数が「やや多い」、1穂当たりもみ数が「平年並み」であったことから「やや多い」となった。登熟は、出穂期以降、低温、日照不足で経過したことから、「やや不良」が見込まれる。気象被害は、台風11号や8月下旬及び9月上旬の大雨の影響により、倒伏の被害が見られる。病害は、穂数の多いほ場で紋枯病が、虫害では、カメムシやニカメイチュウの被害が散見される。被害全体では平年並みが見込まれる。これらのことから、9月15日現在における10a当たり予想収量は510kg(作況指数98)が見込まれる。(9月26日付)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>コシヒカリのふるさとを誇りに、安全でおいしいお米を福井から全国へ。</li> </ul>
長野	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在の作柄は、全もみ数が「平年並み」で、登熟は「やや不良」と予想されることから、作況指数は「99」が見込まれる。地帯別には、東信は、全もみ数が平年並みで、登熟は平年並みと予想されることから「99」、南信は、全もみ数が平年並みで、登熟はやや不良と予想されることから「99」、中信は、全もみ数が平年並みで、登熟はやや不良と予想されることから「98」、北信は、全もみ数がやや多く、登熟はやや不良と予想されることから「102」と、それぞれ見込まれる。出穂最盛期は8月6日で、平年に比べ3日早かった。穂数は、「やや多い」となった。1穂当たりもみ数は、穂数がやや多かったことから、「やや少ない」となった。全もみ数は、穂数がやや多く、1穂当たりもみ数がやや少ないことから、「平年並み」となった。登熟は、出穂・開花期以降の8月が曇雨天続きで、日照不足となったことから、「やや不良」が見込まれる。(9月26日付)</li> <li>9月6日現在、平坦地の早生種(あきたこまち、美山錦等)は9月初旬から収穫が始まっている。「コシヒカリ」は中期~後期。低温の影響で生育が遅れ、生育の進みは、概ね平年並と予想。(9月6日付)</li> <li>9月16日から向こう1ヶ月間は、県下全域で穂いもちの発生量が「並~やや多」、紋枯病が「多」の予報。(9月16日付)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生産者の人々が土づくりからこだわり、丹精込めて作られた長野米は、最新設備の工場徹底した品質管理のもと、全国各地にお届けしています。</li> </ul>

	品質概況等	備考
滋 賀	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 穂数は、茎数がやや多くなったこと等から「やや多い」となった。一穂当たりもみ数は、幼穂形成期がおおむね天候に恵まれたことから「平年並み」となり、全もみ数は「やや多い」となった。</li> <li>・ 登熟は、出穂期以降台風、大雨、日照不足に加え、8月中旬～9月上旬にかけて低温で経過したこと等から「不良」が見込まれる。これらのことから、10a当たり予想収量は503kg(作況指数97)が見込まれる。地帯別には、湖南は511kg(同97)、湖北は485kg(同97)が見込まれる。(9月26日付)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 近江米のブランド方向上に向けた主力品種としての新品種「みずかがみ」の育成・拡大(815%、新規)、および輸出販路の開拓(2%、新規)</li> </ul>
兵 庫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 穂数は、田植え後の気象がおおむね順調に経過したことから平年並みとなった。1穂当たりもみ数は、幼穂形成期の気温・日照時間が平年を下回って経過したことからやや少なくなった。このため、全もみ数はやや少なくなった。登熟は、8月が気温・日照時間ともに平年を下回って経過したことから県全体ではやや不良が見込まれる。以上のことから、9月15日現在の10a当たり予想収量は、486kg(作況指数96)が見込まれる。地帯別には、県南は483kg(同96)、県北は496kg(同98)、淡路は491kg(同97)が見込まれる。(9月26日付)</li> <li>・ 県北部の極早生品種の出穂期は、フクヒカリ、コンヒカリはほぼ平年並み。平年よりも茎数が多い。県南部における出穂期は、極早生品種のキヌヒカリは平年並み、中生品種のヒノヒカリ、晩生品種の山田錦も平年並みの見込み。成熟期も平年並みと考えられる。(9月1日付)</li> <li>・ 警報トビイロウンカの発生量が県下全域で「多」。特に、普通期栽培(ヒノヒカリ、山田錦等)の水稻について直ちに防除を徹底するよう指導。(9月12日付)</li> <li>・ 9月19日から向こう1か月は、ヒメトビイロウンカの発生量が「やや多」、トビイロウンカの発生量は「多」との予報。(9月19日付)</li> <li>・ トビイロウンカが9月前半に極めて多い発生が確認され、9月12日付で警報が発表された。(農水省 9月18日付)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「集荷決起大会」および「ほんまもん山田錦需要拡大イベント(東京)」の開催等によるグレードアップ兵庫県産山田錦の取組強化(11,650%、前年比104%)</li> </ul>
岡 山	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 出穂最盛期は、中北部では梅雨明け後の7月中旬から7月下旬にかけて高温・多照で経過したことから生育が進み、平年に比べて2日早い8月1日となった。南部は出穂前の8月が低温・日照不足で経過したことから生育が遅れ、平年に比べて4日遅い9月1日となった。</li> <li>・ 穂数は、中北部では初期生育が良好で分けつが促進され茎数が多かったことからやや多くなった。南部は茎数が平年並みを確保していたものの、幼穂形成期にあたる8月が日照不足であったことからやや少なくなった。県全体では平年並みとなった。</li> <li>・ 1穂当たりもみ数は、中北部では幼穂形成期にあたる7月の天候がおおむね良好であったこと、南部は穂数減少の補償作用等から、いずれも平年並みとなった。この結果、全もみ数は中北部ではやや多く、南部はやや少くなり、県全体で平年並みとなった。</li> <li>・ 登熟は、8月の記録的な日照不足の影響により中北部では不良が見込まれる。南部では日照不足の影響がみられるものの平年並みが見込まれる。県全体ではやや不良が見込まれる。以上のことから、10a当たり予想収量は中北部が480kg(作況指数94)、南部で519kg(同97)と見込まれ、県全体の10a当たり予想収量は504kg(同96)が見込まれる。(9月26日付)</li> <li>・ イネ紋枯病の発生量が、9月上旬以降、中・南部地帯で「多」と予想。(9月5日付注意報)</li> <li>・ トビイロウンカは、9月16日の巡回調査の結果、県南部地帯での発生圃場率は63.0%と高くなっている。また、増殖率の高い短翅型雌成虫も広範囲で確認されており、今後、中生・晩生品種で埋枯れ被害が発生する恐れがあり防除の徹底を指導。(9月19日付)</li> <li>・ 中国の一部地域では、トビイロウンカの発生が「多い」と予想。</li> <li>・ 中国地域では、イネいもち病(穂いもち病)の発生が「多い」または「やや多い」と予想。(農水省 9月18日付)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実需者ニーズに即した酒造好適米の生産拡大(1,684%、前年比111%)</li> </ul>
広 島	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 出穂最盛期は、7月下旬が高温多照となったものの、8月が低温で推移したことから、平年並みとなった。穂数は、茎数がやや多かったことから、平年に比べてやや多くなった。1穂当たりもみ数は、7月上旬の日照時間が少なかったことに加え、穂数が多かったことによる相反作用から、平年に比べてやや少なくなった。全もみ数は、穂数が平年に比べてやや多かったものの、1穂当たりもみ数がやや少なかったことから平年並みになった。</li> <li>・ 登熟(実入り)は、8月に曇雨天が続いたことから、同月の日照時間が平年を大幅に下回り、登熟が抑制されたため、やや不良が見込まれる。この結果、10a当たり予想収量は497kg(作況指数95)が見込まれる。(9月26日付)</li> <li>・ 中国の一部地域では、トビイロウンカの発生が「多い」と予想。</li> <li>・ 中国地域では、イネいもち病(穂いもち病)の発生が「多い」または「やや多い」と予想。(農水省 9月18日付)</li> <li>・ 9月上旬の中南部の巡回調査(20地点)の結果は、トビイロウンカの発生地点率が65%(平年40.8%、前年82.4%)、発生程度が1.42(平年1.21、前年1.76)とやや多い発生が認められ、特に中西部及び南西部で多発している。いもち病については、発生地点率が63%と過去2番目に高く、平均発生程度は1.27と過去最も高い値になっている。また、紋枯病は発生地点が急激にふえており、稲こし病も発生地点率等が過去4年で最も高い値になっている。(9月9日付)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 米の多収性品種「あきさかり」を新たに追加した、「JAグループを挙げた米頒布会の実施(頒布19,524件、前年比104%)</li> </ul>

	品質概況等	備考
山口	<ul style="list-style-type: none"> <li>1㎡当たり穂数は、5月に平年を上回る日照時間が続いたため、早生種では多くなったものの、6月から7月中旬までの日照不足により、中生・晩生種では平年に比べ少なくなったことから、全体では「平年並み」となった。1穂当たりもみ数は、早生種では6月から7月中旬までの日照不足の間に幼穂形成期を迎えたためもみ数の増加に影響を受けたうえ、更に1㎡当たり穂数が多かったことにより平年に比べ少なく、中生・晩生種は8月の日照不足の間に幼穂形成期を迎えたものの、1㎡当たり穂数が平年に比べ少なくなったことから平年並みを見込んでおり、全体では「やや少ない」となった。この結果、1㎡当たり全もみ数は、「やや少ない」となった。</li> <li>登熟は、8月上旬から9月初旬までの記録的な日照不足により、早生種に大きな影響があったものの、以降天候が回復したことにより中生・晩生種の登熟は影響が少ないと見られ、全体では「やや不良」が見込まれる。この結果、9月15日現在の10a当たり予想収量は479kg（作況指数95）が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>中国の一部地域では、トビイロウンカの発生が「多い」と予想。（農水省 9月18日付）</li> <li>9月8～10日の調査では、トビイロウンカの発生ほ場率が81.8%（前年78.1%、平年36.0%）、10株当たり虫数17.7頭（前年39.1頭、平年7.5頭）で平年に比べやや多かった。9月下旬以降に収穫する県内全域で「やや多」の予想。（9月12日付）</li> <li>9月8～10日の調査では、病害虫いもち病（穂いもち）発生量「多」、斑点米カメムシ類発生量「やや多」との予報。（9月11日現在）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・収穫前契約、用途別結び付き玄米販売の拡大（収穫前契約22,800%、前年比103%）</li> </ul>
愛媛	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在における水稻の作柄は、茎数がやや多く確保されていたことから穂数もやや多くなったことに加えて、7月中旬から下旬にかけての幼穂形成期が高温多照で推移したことから、1穂当たりもみ数も平年並みとなった。このことから、1㎡当たり全もみ数は平年並みが確保された。</li> <li>登熟については、8月の気温が低温傾向で推移するとともに、気温日較差が小さく、日照時間が過去最少を記録するなど不利な条件が重なったことから、やや不良が見込まれる。これらのことから、10a当たり予想収量は487kg、作況指数98が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>四国の一部地域では、トビイロウンカの発生が「やや多い」と予想。（農水省 9月18日付）</li> <li>9月のいもち病（穂いもち）の発生量は「やや多～多」、紋枯病は「やや多」、トビイロウンカは「やや多」、斑点米カメムシ類は「並～やや多」との予報。（9月8日付）</li> <li>トビイロウンカの発生量が県下全域で「やや多い～多」。（9月11日付注意報）</li> <li>短期栽培あきたこまちは収穫期を迎える。今年は出穂は平年よりやや遅く、今後の平均気温も平年並または低くなる見込みのため、成熟期は平年より遅いと予測。（9月11日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米の新奨励品種「にこまる」の生産集荷拡大（集荷1,030%、前年比335%）、および品質向上に向けた実証試験（施肥体系、栽植密度）の実施（県下10地区）</li> </ul>
高知	<ul style="list-style-type: none"> <li>早期栽培の初期生育は、4月前半の低温と強風のためやや抑制されたが、その後、天候に恵まれたことから生育は回復し、穂数は平年並みとなった。</li> <li>1穂当たりもみ数は、幼穂形成期となる6月の低温と日照不足の影響等によりやや少なくなり、全もみ数は、穂数が平年並みとなったものの、1穂当たりもみ数がやや少なくなったことから、やや少なくなった。</li> <li>登熟は、8月に入って日照不足となったものの、生育期の天候に恵まれ稲体が健全であったことや、7月中下旬の多照と気温日較差が大きかったことから、やや良となった。</li> <li>被害は、8月上旬の台風第12号、第11号による冠水や倒伏等が発生し、その後も降雨の日が続いたことから刈取りが遅れ、倒伏したほ場では穂発芽等が発生した。また、一部で黄化萎縮病の発生がみられたことなどから、総じてやや多くなった。</li> <li>これらの結果、10a当たり収量は470kg、作況指数「98」となった。（9月26日付）</li> <li>四国の一部地域では、トビイロウンカの発生が「やや多い」と予想。（農水省 9月18日付）</li> <li>8月の日照時間が平年の52.3%、降水量は平年の約5倍の極端な天候不順に見舞われたことから、県東部と中央部、中西部において葉いもちが多発生となっており、特に県東部では発生程度も高くなっている。斑点米カメムシ類の県内全体の発生率はほぼ平年並。（8月29日付）</li> <li>ヒメトビウンカの発生が「多」と予想。（9月3日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1等米比率の維持・向上に向けた、高温と日照不足に対応した高品質米生産の基本技術の徹底（共計1等米比率24%、前年26%）</li> </ul>
福岡	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月15日現在の作柄は、穂数がやや少なく、1穂当たりもみ数が平年並みとなったことから、全もみ数はやや少なくなった。</li> <li>登熟は、出穂期以降の天候が順調であることから平年並みが見込まれる。この結果、10a当たり予想収量は479kg（作況指数96）が見込まれる。</li> <li>地帯別には、福岡464kg（同96）、北東部465kg（同96）、筑後496kg（同96）が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>出穂期はいずれの品種も平年より2～4日遅く、穂数は平年並～8%少ない。今後の気温が平年並で経過すると、成熟期は平年より4～6日遅いと予想。（9月5日付）</li> <li>九州の一部地域では、トビイロウンカの発生が「やや多い」と予想。</li> <li>九州地域では、イネいもち病（穂いもち）の発生が「多い」または「やや多い」と予想。（農水省 9月18日付）</li> <li>9月2半旬調査の結果、トビイロウンカの発生が県下全域で平年に比べ「やや多」。（9月9日付注意報）</li> <li>9月のいもち病（葉いもち、穂いもち）の発生量は「多」、トビイロウンカは「並」と予報。（9月1日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地産地消・食育の取組強化に向けた学校給食米の一元供給および金のめし丸県産米「元気づくし」の作付拡大（4,260ha、前年比112%）</li> </ul>
熊本	<ul style="list-style-type: none"> <li>県北地帯の全もみ数は、穂数が「やや少ない」となり、1穂当たりもみ数が「平年並み」となったことから「やや少ない」となった。登熟は、日照不足による生育の遅れがみられるものの、全もみ数がやや少なくなったことから「平年並み」が見込まれる。このことから、10a当たり予想収量は517kg（作況指数98）が見込まれる。</li> <li>阿蘇地帯の全もみ数は、穂数が「やや多い」となったものの、1穂当たりもみ数が「やや少ない」となったことから「平年並み」となった。登熟は、台風第11号による靄ずれ及び出穂期以降日照不足に推移していることから「やや不良」が見込まれる。このことから、10a当たり予想収量は488kg（作況指数96）が見込まれる。</li> <li>県南地帯の全もみ数は、穂数は「平年並み」となったものの、1穂当たりもみ数が「やや少ない」となったことから「やや少ない」になった。登熟は、日照不足による生育の遅れがみられるものの、全もみ数がやや少なくなったことから「平年並み」が見込まれる。このことから、10a当たり予想収量は496kg（作況指数97）が見込まれる。</li> <li>天草地帯の全もみ数は、穂数は「平年並み」となったものの、1穂当たりもみ数が「やや少ない」となったことから「やや少ない」となった。登熟は、早期においては出穂期以降日照不足に推移したが7月中下旬の天候が回復したこと、普通期は生育の遅れがみられるものの全もみ数はやや少なくなっていることから、全体では「平年並み」が見込まれる。このことから、10a当たり予想収量は429kg（作況指数98）が見込まれる。（9月26日付）</li> <li>九州の一部地域では、トビイロウンカの発生が「やや多い」と予想。</li> <li>九州地域では、イネいもち病（穂いもち）の発生が「多い」または「やや多い」と予想。（農水省 9月18日付）</li> <li>普通期・晩期水稻に県内全域で出穂期以降にいもち病（穂いもち）の発生程度が「多」。（9月4日付注意報）</li> <li>9月1～2日の調査の結果、早植え水稻ではトビイロウンカの成幼虫数、発生ほ場率ともに昨年並みの発生。普通期水稻では、昨年、平年より少ないが、一部に要防除水準を超えているほ場もあった。（9月5日付）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・需要に応じた売れる米づくりの推進。</li> </ul>

	品質概況等	備考
宮 崎	<ul style="list-style-type: none"> <li>早期栽培の穂数は、4月下旬から5月上旬の気温が平年を下回って推移したが、5月が多照で推移したことから、1㎡当たり全穂数は平年並みとなった。</li> <li>全もみ数は、穂数、1穂当たりもみ数ともに平年並みとなったことから、平年並みとなった。</li> <li>登熟は、出穂期となる6月下旬から7月上旬が低温・寡照で推移したが、7月中旬から下旬にかけては高温・多照で推移したことから、平年並みとなった。</li> <li>被害は、出穂期に台風の影響から生育ステージの違い地帯を中心とした不稔粒の発生やいもち病、紋枯れ病、カメムシ等の発生がみられたが、総じて平年並みとなった。</li> <li>以上のことから、10a当たり収量は488kg（作況指数102）となった。（9月26日付）</li> <li>九州の一部地域では、トビイロウンカの発生が「やや多い」と予想。（農水省 9月18日付）</li> <li>9月中旬の巡回調査(40地点)の結果、トビイロウンカ（第3世代）が普通期水稻に県内全域で発生程度「やや多〜多」の予報。（9月17日付注意報）</li> <li>コンヒカリの玄米の外観は、地域差はあるものの、全体的に光沢、粒ぞろい、粒形は良好である。白未熟粒の混入は全体的に少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入はやや多く、地域による差がある。</li> <li>胴割粒及び被害粒の混入は比較的少ないが地域により差がある。死米の混入はやや多く、これも地域による差がある。着色粒は全体的に散見される程度である。（8月15日付 精米工）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国における農地の集積・集約化や米をはじめとする農業政策、県でのフードビジネス推進への取り組みなど、各種政策に対応するとともに事業環境の大きな変動に柔軟な対応をしていく。</li> </ul>
鹿 児 島	<ul style="list-style-type: none"> <li>早期栽培の全もみ数は、穂数が平年に比べてやや少なかったものの、1穂当たりもみ数が多かったことから、平年並みとなった。</li> <li>登熟は、台風による倒伏や稔ずれ等の影響が一部あったものの、登熟後期の7月中下旬が高温・多照で推移したこと、台風や雨の影響で刈取りが遅くなって登熟が進んだことからやや良となった。</li> <li>被害は、生育初期と出穂期の日照不足や台風による倒伏等はあったが被害程度は軽く、病虫害の発生も少なかったことから平年に比べてやや少なくなった。</li> <li>この結果、10a当たり収量は455kg（作況指数103）となった。（9月26日付）</li> <li>九州の一部地域では、トビイロウンカの発生が「やや多い」と予想。（農水省 9月18日付）</li> <li>9月の普通期水稻のいもち病（穂いもち）、トビイロウンカ及び斑点米カメムシの発生は「やや多」の予報（8月27日付）</li> <li>9月2〜4日の巡回調査の結果、普通期水稻（中〜晩生品種）のトビイロウンカの発生ほ場率は平年に比べやや高かったが、発生程度が大部分で少発生の為現時点での坪枯れ被害は認められない。（9月8日付）</li> <li>コンヒカリの玄米の外観は、光沢は地域によりかなり差はあるが、粒ぞろい及び粒形は良好である。白未熟粒の混入は全体的に少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は地域により差がある。胴割粒及び被害粒の混入は比較的少ないが地域により差がある。死米の混入はやや多く、これも地域により差がある。着色粒は全体的に散見される程度である。（8月22日付 精米工）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大規模稲作農家との品質基準に基づく4社契約取引の拡大ならびに行政と一体となった非主食用米の産地化推進。</li> </ul>

注1：自治体等公表資料については地方自治体及び出先機関等が公表している資料から抜粋、日付は公表日。

注2：備考欄のイタリック体はホクレン農業協同組合及び全農本部等のホームページで公表されている資料を基に取り纏め。ゴシック体は全国農業協同組合連合会のホームページで公表されている資料から抜粋。

注3：（精米工）とあるものは、一般社団法人日本精米工業会が提供している「米質概況情報」から抜粋。但し「米質概況情報」は一般社団法人日本精米工業会が正会員精米工場から得たサンプル（玄米）を測定したものであり、母集団として産地の評価を決めるものではない。

注4：更新箇所については下線で表した。

## 参考資料

平成25年産水陸稲の収穫量(農林水産省、北海道農政事務所、東北農政局、関東農政局、北陸農政局、近畿農政局、中国四国農政局、九州農政局)、  
平成24年産水陸稲の収穫量(農林水産省)、  
平成26年産米の農産物検査結果(速報値/平成26年8月31日現在)(農林水産省)、  
平成25年産米の農産物検査結果(速報値/平成25年8月31日現在)(農林水産省)、  
平成26年産水稲の作付面積及び9月15日現在における作柄概況(農林水産省)、  
平成25年産米の都道府県別の生産数量目標について(農林水産省)、  
平成26年産米の都道府県別の生産数量目標について(農林水産省)、  
平成26年度病害虫発生予報第7号(農林水産省)  
玄米品質概況(平成26年産)(一般社団法人日本精米工業会)

農作物の生育状況(9月15日現在)(北海道)、  
平成26年度病害虫発生予察情報第17号9月予報・第18号8月予報(北海道病害虫防除所)、  
作柄調査報告(地独)青森県産業技術センター農林総合研究所、  
平成26年度水稲病害虫発生情報第5号(9月上中旬)(青森県病害虫防除所)、  
平成26年度水稲の刈取状況について(9月16日現在)(宮城県)、  
生育状況(秋田県ホームページ「こまちチャンネル」http://www.e-komachi.jp/)、  
平成26年度農作物病害虫発生予察情報発生予報第5号(9月予報)(秋田県病害虫防除所)、  
おいしい米づくり情報第10号(村山農業技術普及課)、主要な農作物の生育情報平成26年度第6号(福島県)、  
病害虫発生現況情報(平成26年9月)(栃木県農業環境指導センター)、  
病害虫発生現況情報(栃木県農業環境指導センター)、  
平成26年度水稲の生育概況vol.4(埼玉県農林総合研究センター水田農業研究所)、  
平成26年度病害虫発生予報第5号(9月予報)(埼玉県病害虫防除所)、  
平成26年度病害虫発生情報第3号(千葉県農林総合研究センター)、  
水稲の生育状況と今後の管理対策(第11号)(新潟県)、新潟稲作速報No.9・No.9-12(新潟農業普及指導センター)、  
「越のかがやき米」技術対策資料(号外)(越のかがやき米改良協会)、稲作情報No.14(南魚沼農業普及指導センター)、  
水稲積算温度(十日町市)H26・収穫適期のめやす(津南町米原)H26(十日町農業普及指導センター)、  
病害虫発生予報第6号(富山県農林水産総合技術センター)、  
平成26年度作物技術普及情報18号(松本農業改良普及センター)、病害虫発生予報第6号(長野県病害虫防除所)、  
平成26年度兵庫県農業気象技術情報第5号(9月情報)について(兵庫県)、  
平成26年度病害虫発生予察警報第1号(兵庫県)、平成26年度病害虫発生予察予報第5号(兵庫県病害虫防除所)  
平成26年度病害虫発生予察注意報第4号・植物防疫情報第3号(岡山県病害虫防除所)、  
平成26年度病害虫発生予察情報(技術情報第4号)(広島県西部農業技術指導所)、  
平成26年度農作物病害虫発生予察技術資料第5号・9月の病害虫発生予報9月11日現在(山口県病害虫防除所)、  
気象情報に基づく技術対策・作物(愛媛県)、病害虫発生予報(9月)(愛媛県)、  
平成26年度病害虫発生予察注意報(第4号)(愛媛県)、  
平成26年度病害虫発生予察予報第6号(9月)・平成26年度病害虫発生予察技術情報第3号(高知県病害虫防除所)、  
平成26年度病害虫発生予報第6号について・平成26年度病害虫発生予察注意報第2号について(福岡県農林業総合試験場)、  
福岡県米麦大豆生育情報(福岡県農林業総合試験場)、平成26年度病害虫発生予察注意報第4号(熊本県病害虫防除所)、  
トビイロウンカの発生状況(技術情報第11号)について(熊本県病害虫防除所)、  
平成26年度病害虫発生予報第6号(鹿児島県病害虫防除所)、  
平成26年度技術情報第8号(普通期水稲のトビイロウンカ)について(鹿児島県病害虫防除所)

ホクレン農業協同組合連合会ホームページ、JA全農とちぎホームページ、JA福井県経済連ホームページ、  
JA全農長野ホームページ、JA熊本経済連ホームページ、JA宮崎経済連ホームページ、JA鹿児島県経済連ホームページ、  
都府県本部による国産農畜産物の販売力強化に向けた取り組み(全国農業協同組合連合会ホームページ)